

現代青年の抱く死生観の構造

—死に関するエピソード作成の試みを通して—

柿田明梨¹⁾ 原幸一²⁾ 竹内健児³⁾

**Structure of view of life and death in adolescence
—make the episode about death—**

Akari KAKITA Koichi HARA Kenji TAKEUCHI

Department of psychology, The University of Tokushima

Abstract

This study was to explore the view of death. The purpose of this study was to explain a preventive concern about treating issue of death in clinical way. 11 texts of episodes about death were devised for the study based on Kubler-Ross's Five-stage of death acceptance. These texts of episodes were tested about effectiveness of exploring the aspect of death. Subjects (44 undergraduate students) asked to responds these texts about death. As a result, these responses were classified in 3 categories; "emotional response", "relational response", "objective response". Subjects experienced funeral and not emotional response evaluate a death as positive and as negative phase. And the more subjects contemplate of death, the more subjects evaluate a death as a emotional phase. The subjects not contemplate as a objective phase. Each episode has individuality. The episodes has different feature. The response of episode has difference among individuals. As a result, these episodes have expecting use for case study.

Key Words : view of life and death, the episode, basic study

-
- 1) 医療法人 若葉会 近藤内科病院 The Medical Corporation Wakaba Society Kondo Hospital
 - 2) 徳島大学 総合科学部 Faculty of Integrated Arts and Science, The University of Tokushima
 - 3) 立命館大学心理・教育相談センター Ritsumeikan Counseling Center

Ⅰ. 問題と目的

1. はじめに

心理臨床活動において、死の問題について考えさせられる機会は少なくない。例えばクライアントの自殺念慮や、被災者支援、犯罪被害者支援などが挙げられる。このように死に関わる問題に臨床心理士が関わる場面は多いが、その際臨床心理士が行う活動には二つの面があると考えられる。一つは、死に直面した人やその周囲の人に対して心のケアを行い、彼らを支えることである。もう一つは、自殺を未然に防ぎ、やがて死の問題に直面したときの衝撃や動揺を少しでも和らげるといった予防的な活動である。予防的活動については、近年「いのちの教育」や「死への準備教育」と呼ばれるデス・エデュケーションが注目され始めている。デス・エデュケーションとは、「死を身近な問題として考え、生と死の意義を探求し、自覚をもって自己と他者の死に備えての心構えを習得する(デーケン, 1986)」ことを主な目的とした教育のことを指し、死の予防的活動への関心が高まりつつあることがうかがえる。

ここで本研究では、前もって死について考えてくことが、後の死の問題に関わった時の対処を円滑に進めることができるのではないかと考える。したがって、死の問題に対する心理支援活動の中でも、特に予防的側面に焦点を当て、臨床心理士としてどのような活動を行っていきけるかについて、その可能性を探っていきたい。

2. 方法論の検討ー死に関するエピソードの作成

過去の死生観研究を振り返ってみると、尺度評定を用いた質問紙法や面接法によって行われている(例えば丹下, 2004, 隈元, 2003)。尺度を用いた研究では調査者の求める回答が確実にかつ重点的に得やすく、客観的にみることができ、分析しやすい。しかし、具体的な場面に則した形で、その人が死とどう向き合っているのかを取り上げることは困難である。面接法では、被検者は体験の具体的な内容を想起しやすいが、面接においては語られる内容は至極個人的なものになり、研究を行う際に他の被検者との比較が難しくなる。そこで、本研究では上記の問題点の克服と多種多様な死の観点からの回答を得るための方法として、死に関するエピソードの使用を提案する。

3. 研究の目的

本研究ではデス・エデュケーションなどの形で、臨床心理士が死の問題に予防的に関わっていくための基礎研究として、現代人の死生観のあり方を検討する。同時に、個人の死生観を把握する方法を開発する。その方法として、複数の死に関するエピソードを作成し、それを用いて死生観を明らかにすることとする。さらにエピソード自体の有用性についても検討することとする。死生観は、新明解国語辞典(第6版, 2005)、丹下(1995)、三好(1999)の定義を受けた。したがって、本論では死生観を「死あるいは生死に対する価値観や感情、考え方とそれに基づいた人生観」と定義する。

Ⅱ. 方法

1. エピソードの作成

エピソードを複数作成する上で、まずはテーマの選定を行った。まずキューブラー

=ロス（1971）の死の過程を参考に「否認」、「怒り」、「取引」、「抑うつ」、「受容」、「希望」をテーマとして扱った。さらに、現代社会において問題として取り上げられることの多い「尊厳死」、「自殺」を加えた。その他にも、死に関心を持つことの「死への興味」、自然の摂理としての「食物連鎖」、自己犠牲としての死である「犠牲の死」を加えた。以上、エピソードは合計 11 個のテーマで作成することとした。

2. 予備調査

予備調査では主にエピソードやその他の質問の加筆・修正と、回答者の 11 個全てのエピソードへの反応を伺うことを目的とした。

(1)対象者と調査時期

A 県内の大学に通う男女各 10 人（男＝10 人，女＝10 人，平均年齢 20.75，標準偏差 0.32）を対象に，2006 年 6 月から 9 月にかけて実施した（有効回答率 100％）。

(2)調査内容

質問紙を講義中または個別に配布し，回収した。カウンターバランスを取るために，半数の対象者にはエピソードの順番を逆にした。

(3)質問紙の内容

①フェイスシート

②回答者の死に関する体験についての質問

- (・)葬式参列体験の有無，その経験をどう感じたか，また今はどう感じているか。
- (・)死に面した危機体験の有無，その経験をどう感じたか，今はどう感じているか。
- (・)この 1 ヶ月の間に死（例えば自分や他人の死，ペットの死など）について考えたことがあるか。どのような時に，どのようなことを考えたのか。
- (・)この 1 ヶ月の間に死について誰かと話し合ったことがあるか。誰とどのような時にどのようなことを話し合ったのか。
- (・)生まれ変わりを信じるか。

③11 個のエピソードとそのエピソードについての質問

- (・)登場人物に対して感じたこと。
- (・)登場人物と同じ立場になった場合どうするか。
- (・)全体を通して感じたこと。

なお，各エピソードによって質問は若干変えてある。

④印象に残ったエピソードについて，2 つ。

(4)予備調査の結果

回答者の負担を考慮し，調査時間は 30 分を目安とし，本調査では質問紙で用いるエピソードの数を 4 個に絞ることとした。また，エピソードとその質問内容について，得られた回答の文字数と質問に対する回答の内容について検討を行った。その結果，11 のエピソードのうち，回答の文字数が他に比べて極端に少ないものはみられず，特

的を外れた回答はなかった。印象に残ったものとしては、各エピソードが万遍なく選ばれていた。このことから、本調査においても 11 全てのエピソードとその質問内容を用いることとした。

3. 本調査

(1)対象者と調査時期

先行研究から死の概念は青年期でほぼ理解されるようになることが示されていること、大学生を対象としたものが多くみられ比較しやすいことから、本研究でも青年期の大学生を対象とした。また、11 あるエピソードを万遍なく4つずつ使用するためには、各回答者に 11 あるエピソードは 16 回ずつ用いられることとなるため、回答者は 44 人とした。そこで、A 県内の大学に通う男女 46 名（男性=14 人、女性=32 人）を対象に、2006 年 11 月から 12 月にかけて実施した。その際、内 2 人には無記名欄があったため、その 2 人を除外し新たに 2 名を加えた 44 人（男性=14 人、女性=31 人、平均年齢 20.30 歳、標準偏差 1.23）を分析の対象とした（有効回答率 95.7%）。

(2)調査内容

講義中に調査協力者を募り、後日集合を依頼し質問紙を配布・その場で回収した。

(3)質問紙の内容

誤字脱字の加筆修正をほどこした以外にエピソードの内容や質問には特に問題はな
いと、予備調査で行った④の質問を除き同じものを使用した。

Ⅲ. 結果

1. 死生観の構造の分析

(1)エピソードの回答のカテゴリー化

本調査で得られたエピソードに対する質問の回答を、3 人の大学院生によってエピソードごとに K J 法を用いて分類することとした。その結果、エピソードごとに分類されたカテゴリーを以下にまとめた。

①エピソード 1

このエピソードでは「受容」をテーマに作成した。内容は夢の中で主人公が同級生とともに死から逃れようとするが、同級生は自ら死を選んだため主人公のみで逃げ出すと、夢から覚めた後、同級生は死んだという知らせを受けるといものである。

②エピソード 2

このエピソードでは「取引」をテーマに作成した。内容はふたりの登場人物が同様に死を目前に控えたが、一方は日常と変わらぬ生活を貫き、もう一方は全財産を投げ打ってでも死から逃れようとしたが、結局どちらも死んでしまうといものである。

③エピソード 3

このエピソードでは「犠牲の死」をテーマに作成した。内容は、とある夫婦の夫が川で溺れている他人の子どもを助けるが、自分は死んでしまうといものである。

④エピソード 4

このエピソードでは「死への興味」をテーマに作成した。内容は幼い子が母親に祖父の死について尋ねるが、母親が途中で説明を拒むというものである。

⑤エピソード 5

このエピソードでは「怒り」をテーマに作成した。内容は死刑囚が自分の死刑執行日を知らされた時、可愛がっていたハトを殺すというものである。

⑥エピソード 6

このエピソードは「尊厳死」をテーマに作成した。内容は父親の延命治療選択に迫られた兄弟がそれぞれの意見を話し合うというものである。

⑦エピソード 7

このエピソードは「抑うつ」をテーマに作成した。内容は末期ガンと診断された夫が妻と子どもを遺して死ぬというものである。

⑧エピソード 8

このエピソードは「自殺」をテーマに作成した。内容は自殺を予告した少女がある日行方不明になるが、後にケーキが食べたかったという理由で自殺を延期したということがわかるというものである。

⑨エピソード 9

このエピソードは「否認」をテーマに作成した。内容は母親が死んだペットと同じ外見の鳥を買い、子どもにペットが死んだことを言わないというものである。

⑩エピソード 10

このエピソードは「食物連鎖」をテーマに作成した。内容はチョウチョがクモの巣にかかってしまい、死にたくないと助けを懇願するが、反対にクモは食べないと自分が生きられない、と答えるというものである。

⑪エピソード 11

このエピソードは「希望」をテーマに作成したものである。内容は植物で新芽として誕生した主人公が、いずれ自分は死んでしまうということに気づき、不安になるが近くの大木に諭され死に対する不安を緩和するというものである。

(2) エピソードの回答の中カテゴリー化

11個すべてのエピソードから得られた回答のカテゴリー(以下小カテゴリーとする)をさらに階層化するために、同様にKJ法を用いて中カテゴリーに分類することとした。この結果を図1-1と図1-2に示した(図1-1, 1-2, 丸数字はエピソード番号)。

(3) エピソードの回答の大カテゴリー化

17個の中カテゴリーをさらに階層化するために、KJ法を用いることによって大カテゴリーに分類した。

(4) エピソードの回答の大大カテゴリー化

以上6つのカテゴリーをさらに階層化するために、大大カテゴリーに分類した。その結果、<死に対する感情的評価><死に対する関係的评价><死に対する客観

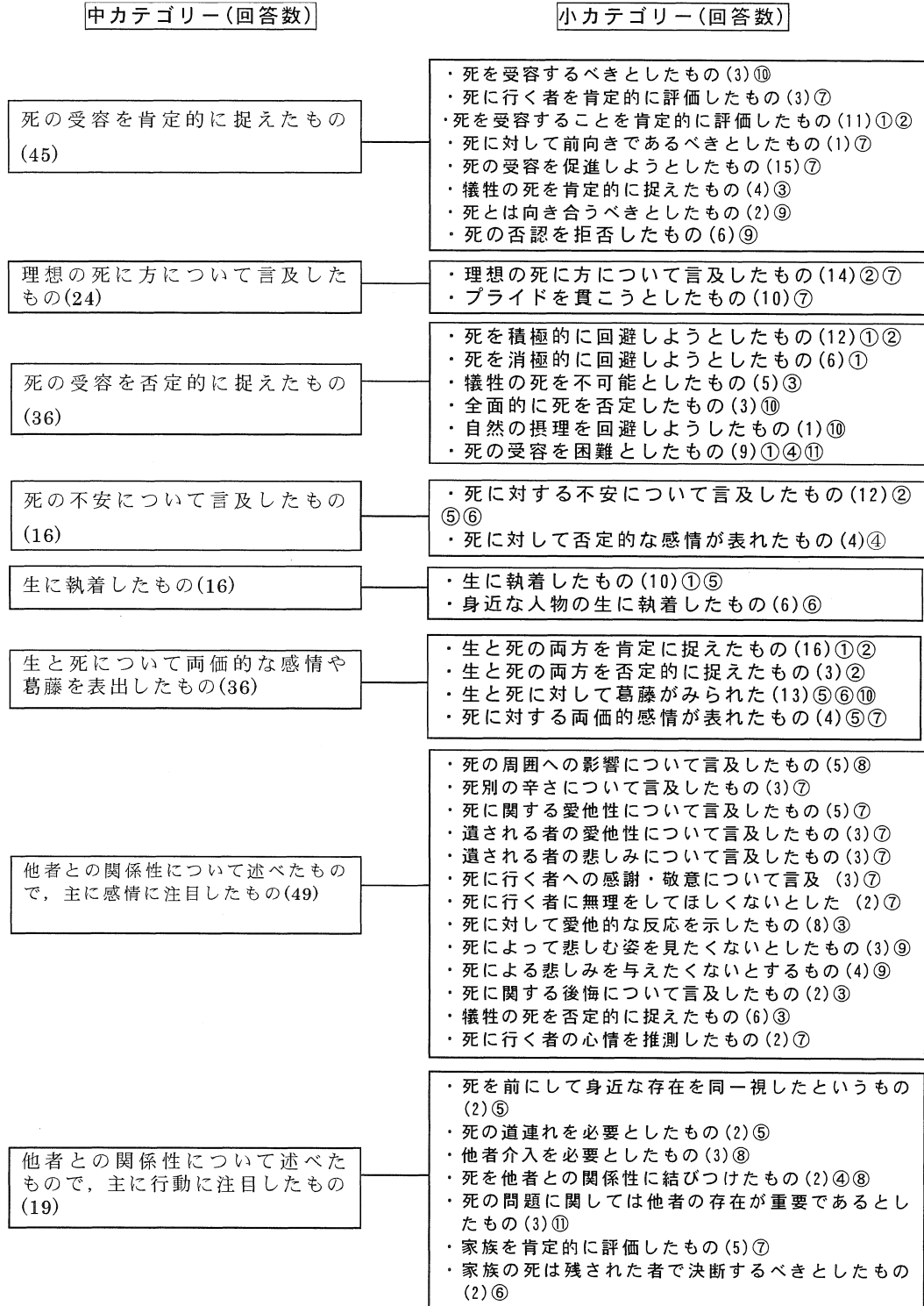


図 1-1 エピソードの回答の中カテゴリー化(1)

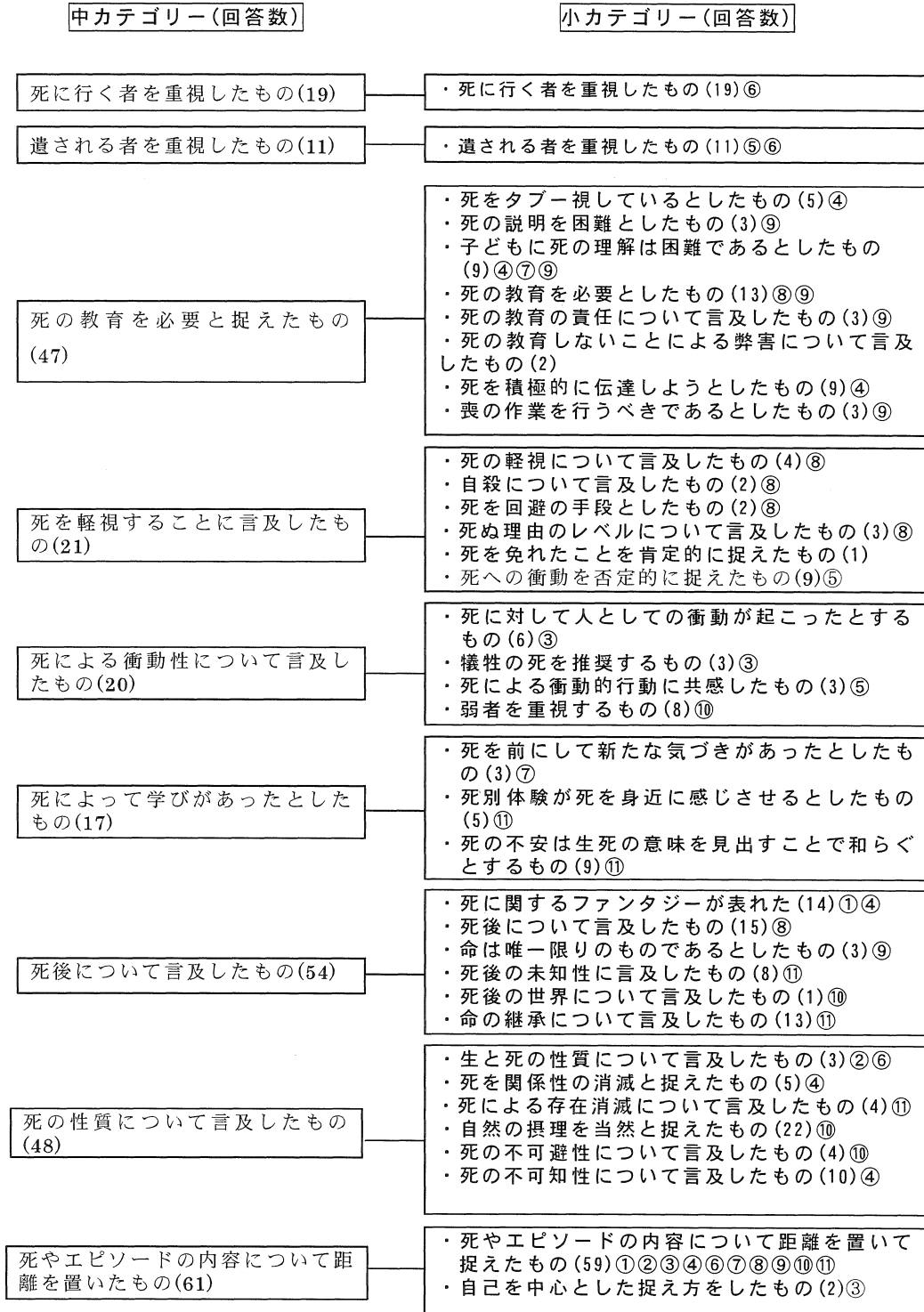


図 1-2 エピソードの回答の中カテゴリー化(2)

価値の3カテゴリーに分類された。以上の結果、大学生の死生観の構造は、大大カテゴリー(3)、大カテゴリー(7)、中カテゴリー(17)、小カテゴリー(84)の4段階に階層化された。大大カテゴリー、大カテゴリー、中カテゴリーの階層を図2に示した(図2)。また、統計処理はカテゴリー間を越えて回答数を加算することにより行った。

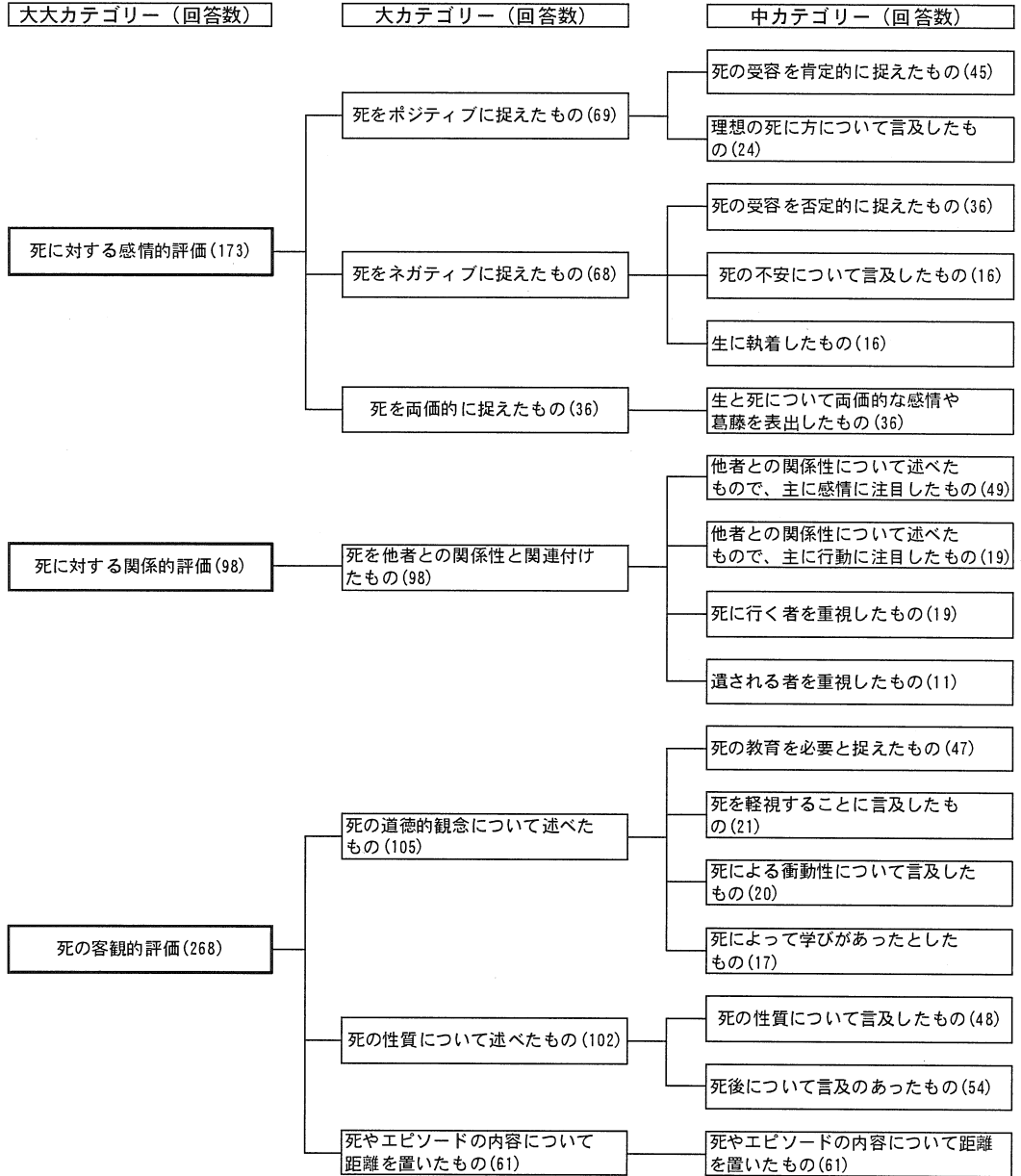


図2 エピソードの回答の大大カテゴリー化

2. 死に関する体験とエピソードとの関連

(1) 大学生の死に関する体験や信念

死に関する体験とエピソードの回答によって得られた死生観の構造との関連をみるために、葬式参列体験に関する質問の回答をまとめた。その結果、調査を依頼した44人のうち、葬式参列体験のあるものは41人であり、そのうち危機的体験のあるもの12人であった。葬式参列体験と危機的体験のどちらも無いものは3人であった。

(2) 葬式参列体験に対する感情と死生観との関連

葬式参列体験を現在どのように捉えているかということが死生観に影響を与えるのではないかと考え、葬式参列体験に対する感情に焦点を当て、分析することとした。そこで、葬式参列体験について感情表現の記述があるものを「感情表出あり群」(14名)、葬式参列体験について感情表現の記述がないものを「感情表出なし群」(20名)とした。回答の記述のない者(7名)は分析から除外した。この両者間にエピソードの回答に差がみられるかを調べるために、各回答者の大大カテゴリーないし大カテゴリーに属する回答数を求め、群ごとに求めたその平均値を用いてt検定で比較した。「死を両価的に捉えたもの」においてのみ葬式参列体験に対する感情の有無に有意な差($t=2.042, p<.05$)がみられた。これらの結果は表1の通りである。

表1 感情体験に対する感情表出の有無の差

	表出あり (N=14)	表出なし (N=20)	t値
死に対する感情的評価	3.9286 (1.592)	4.1 (1.997)	0.267 n.s.
死をポジティブに捉えたもの	1.714 (1.139)	1.8 (1.642)	0.169 n.s.
死をネガティブに捉えたもの	1.929 (0.829)	1.300 (1.129)	1.773 n.s.
死を両価的に捉えたもの	0.286 (0.825)	1.000 (1.214)	2.042 *
死に対する関係的评价	1.5 (1.019)	2.400 (1.569)	1.881 n.s.
死に対する客観的评价	7.143 (2.316)	5.75 (2.511)	1.643 n.s.
死の性質について述べたもの	2.571 (1.159)	2.1 (1.553)	0.962 n.s.
死の道德観念について述べたもの	2.714 (1.541)	2.4 (1.465)	0.603 n.s.
死やエピソードの内容について距離を置いて捉えたもの	1.857 (2.445)	1.25 (1.293)	0.85 n.s.

() 標準偏差 * $p<.05$, ** $p<.01$

(2)危機的体験の有無と死生観との関連

危機的体験と死生観構造には葬式参列体験とは違った関連がみられると推測し、危機的体験のある者を「危機的体験あり群」とし、危機的体験のない者を「危機的体験なし群」として、各回答者の大大カテゴリーないし大カテゴリーに属する回答数を求め、群ごとに求めたその平均値を用いてt検定で比較した。しかし、いずれにおいても有意な差はみられなかった。これらの結果は以下の通りである(表2)。

表2 危機的体験の有無の差

	危機的体験あり (N=12)	危機的体験なし (N=32)	t値
死に対する感情的評価	4.75 (1.765)	3.531 (1.813)	1.999 n.s.
死をポジティブに捉えたもの	2.083 (1.782)	1.469 (1.319)	1.248 n.s.
死をネガティブに捉えたもの	1.75 (1.055)	1.406 (1.103)	0.931 n.s.
死を両面的に捉えたもの	0.918 (1.505)	0.656 (1.003)	0.665 n.s.
死に対する関係的评价	2 (1.537)	2.25 (1.606)	0.465 n.s.
死に対する客観的评价	6.25 (2.701)	6.188 (2.206)	0.079 n.s.
死の性質について述べたもの	2.25 (1.138)	2.375 (1.54)	0.255 n.s.
死の道德観念について述べたもの	2.583 (1.131)	2.375 (1.497)	0.424 n.s.
死やエピソードの内容について距離を置いたもの	1.417 (1.782)	1.438 (1.664)	0.036 n.s.

()標準偏差 *p<.05,**p<.01

(3)死の思索体験と死生観との関連

次に、死について思索したことによる死生観の違いについて検討するために、回答者を分類することとした。質問紙において1ヶ月以内に死について考えたことがあり、かつ他者と死について話し合ったことがあると答えた者を「思索あり群」(11名)とした。また、1ヶ月以内に死について考えたことも、他者と死について話し合ったこともない者を「思索なし群」(13名)とした。その他の者(20名)は分析から除外した。「死を両面的に捉えるもの」においてのみ有意な差がみられた($t=2.807, p<.05$)。また、<死の客観的评价>における死の思索の有無による差を調べるためにt検定を行ったところ、有意な差がみられた($t=2.122, p<.05$)。これらの結果は以下の通りである(表3)。

表 3 死に対する思索の有無の差

	思索あり (N=11)	思索なし (N=13)	t値
死に対する感情的評価	5.000 (1.549)	3.077 (1.320)	3.285**
死をポジティブに捉えたもの	1.546 (1.293)	1.4615 (0.967)	0.182 n.s.
死をネガティブに捉えたもの	1.91 (1.044)	1.308 (1.251)	0.219 n.s.
死を両価的に捉えたもの	1.546 (1.440)	0.308 (0.63)	2.807*
死に対する関係的评价	2.182 (1.250)	2.769 (1.833)	0.899 n.s.
死に対する客観的评价	4.909 (2.023)	6.462 (1.561)	2.122*
死の性質について述べたもの	1.727 (1.272)	2.846 (1.463)	1.98 n.s.
死の道德観念について述べたもの	1.818 (1.079)	2.769 (1.423)	1.816 n.s.
死やエピソードの内容について距離を置いたもの	1.364 (1.206)	0.923 (0.862)	1.041 n.s.

()標準偏差 *p<.05,**p<.01

(4)生まれ変わりに対する信念とエピソードの回答との関連

生まれ変わりを信じるものを「信じる群」(28名)とし、生まれ変わりを信じないものを「信じない群」(16名)として、両者の違いによってエピソードの回答から得られた死生観の構造に差がみられるかを検討するために、t検定で比較した。しかし、いずれの死生観カテゴリーにおいても有意な差はみられなかった。これらの結果は以下の通りである(表4)。

表 4 生まれ変わりの信念の有無の差

	信じる (N=28)	信じない (N=16)	t値
死に対する感情的評価	4.75 (1.765)	3.531 (1.813)	1.999 n.s.
死をポジティブに捉えたもの	1.643 (1.311)	1.625 (1.746)	0.038 n.s.
死をネガティブに捉えたもの	1.393 (1.133)	1.688 (1.014)	0.861 n.s.

死を両価的に捉えたもの	0.821 (1.188)	0.563 (1.094)	0.715 n.s.
死に対する関係的評価	2.000 (1.537)	2.25 (1.606)	0.465 n.s.
死に対する客観的評価	6.179 (2.525)	6.125 (1.857)	0.074 n.s.
死の性質について述べたもの	2.321 (1.588)	2.375 (1.147)	0.118 n.s.
死の道德観念について述べたもの	2.571 (1.501)	2.188 (1.328)	0.85 n.s.
死やエピソードの内容について距離を置いたもの	1.286 (1.436)	1.688 (2.056)	0.761 n.s.

() 標準偏差 * p<.05,**p<.01

3. エピソードの特徴

次に、各エピソードにどのような特徴がみられたかについて述べる。ここで、それぞれのエピソードにおいて、大大カテゴリーないし大カテゴリーに属する回答が何%ずつあるかを算出し、小数点第 3 位を四捨五入した。その結果を以下にまとめた（表 5）。

表 5 各エピソードで現れた死生観構造の割合(%)

エピソード	＜感情的評価＞				＜関係的評価＞	＜客観的評価＞			
	ポジティブ	ネガティブ	両価	小計		性質	道德観念	距離	小計
1	18.75	31.25	16.67	81.25	0	4.16	0	14.58	18.75
2	43.75	14.58	10.42	68.75	0	6.25	0	25	31.25
3	8.33	10.42	0	18.75	43.75	0	18.75	18.75	37.5
4	0	10.94	0	10.94	0	42.19	28.13	18.75	89.06
5	0	21.88	18.75	40.63	21.88	0	37.5	0	37.5
6	0	18.75	12.5	31.25	50	6.25	0	12.5	18.75
7	48.44	0	3.13	51.56	40.63	0	6.25	3.13	9.38
8	0	0	0	0	20.83	31.25	43.75	4.17	79.17
9	16.67	0	0	16.67	14.58	6.25	50	12.5	68.75
10	6.25	8.33	10.42	25	0	50	16.67	8.33	75
11	0	10.42	0	10.42	6.25	52.08	29.17	2.03	80.33

IV. 考察

1. 先行研究との比較

ここで、本研究で得られたそれぞれの大大カテゴリーについて丹下(2002)・藤井(2003)の研究によって得られた死生観構造の結果と比較し、その類似点・相違点について考察することとする。

丹下(2002)は「『死』からの連想語の KJ 法による分類」の研究を行った結果、「死」カテゴリー、「生」カテゴリー、「その他カテゴリー」、「分類不能」カテゴリーの4つに大きく分類している。このうち、丹下(2002)の「生」、「その他」、「分類不能」カテゴリーは本研究結果のカテゴリーの中に点在して分類されていると思われたため、「死」カテゴリーに注目することとする。また、藤井(2003)は大学生の持つ死のイメージについて調査するに当たって、「死(死ぬこと)とは?」や「生(生きること)とは?」という質問に対し、箇条書きで答えることを求め、得られた自由記述の分類を行った。金児(1994)は、スピルカからの作成した死観尺度を邦訳し、大学生とその親に回答を求めた。その回答を用いて因子分析を行った。以上、本研究の結果得られた死生観構造の結果と丹下(2002)、藤井(2003)、金児(1994)の表した死生観構造との比較を以下に示した(表6)。

表6 先行研究の死生観構造との比較

本研究	丹下(2002)	藤井(2003)	金児(1994)
死に対する感情的評価	死に対する態度	死に対する感情	苦しみと孤独
死に対する関係的评价	関係の中で起こりうる死	大切な人との別離	挫折と別離
死に対する客観的评价	具体的な死の種類 死のイメージ 客観的な性質 その他(死)	生命の終わり 現実的・客観的側面 孤独と未知 漠然 行為の中断	人生の試練 未知 虚無
	死の文化的側面	スピリチュアルな側面	浄福な来世

以上のことから、本研究で得られた死生観の構造はおおむね妥当な分類であったといえる。しかしながら本研究の結果では丹下(2002)、藤井(2003)、金児(1994)ともにみられたような宗教的側面を持つカテゴリーは得られなかったため、今後そのようなエピソード作成の改良が必要であると思われる。

2. 大学生の死生観構造

(1)客観的な死の捉え方

本研究の結果、回答は<死に対する客観的评价>カテゴリーに含まれるものが多かった。このことは、死は生きている限り知りうるができないものであるため、思弁的に捉えざるを得ないためであると考えられる。また、エピソード2の回答において「まだやり残していることがあるからまだ死にたくない」とする回答が目立ってみられた。これらから、青年期における大学生は生に意欲的であり、死について意識することが少ないと考えられる。他の年代と比較したわけではないので断定はできないが、こうした点が青年期の死生観の特徴と考えられる。今後さらなる研究が必要となるだろう。

(2)死に対する感情

本研究においては大大カテゴリーである「死をポジティブに捉えたもの」、「死をネガティブに捉えたもの」の回答数がほぼ同数であった。このことから、多くの研究が指摘するように、青年期における大学生の死の不安が高いとはいいいにくい。また、エピソードへの回答から、大学生はまだ死を身近なものと捉えることは難しいが、死を見越すことによって改めて生について考えることが可能であることがうかがえた。つまり、大学生はまだ死を身近なものと捉えることは難しいが、死を見越すことによって改めて生について考えることが可能であると考えられる。これは丹下（2004）のいう、青年期は「死に対する恐怖心を否定するわけではないし、死を軽視しているわけでもない。むしろ、生を全うさせようとする意志を持ち続け、かつ死が人生に対して肯定的な作用を持つという認識を抱き続けている」ためと考えられる。

以上のように、大学生の死生観には根本には死をネガティブに感じつつも同時にポジティブに捉えることも可能であるが、いまだ死を現実的に捉えることは難しいことがうかがえる。

(3)死と他者関係

本研究の結果、大大カテゴリーのひとつに〈死に対する関係的評価〉が挙げられた。藤井（2003）は「自分自身にとって、死は漠然とした未知な孤独なものであり、好きなことができなくなるものであるが、他者とのかわりにおいては、永遠のわかれであると捉えている」と述べている。さらに松田（2000）によると、青年期の死に対する不安は自分自身と重要な他者との関連性に焦点が当てられており、青年期は大学生にとって他者は欠かせない存在であることがうかがえる。以上のことから、大学生は他者関係を重要視しており、死について考える際にも関係性に注目しやすいと考えられる。

3. 死に関する体験と死生観構造との関連

(1)葬式参列体験の感情との関連

葬式参列体験に対する感情表出の有無による差を分析した結果、葬式参列体験に対して現在は「特に何も感じない」など感情表出がみられない者の方が、葬式参列体験に対して現在においても「辛い」や「悲しい」などの感情表出がみられた者より死を両面的に捉えやすいことがわかった。先行研究において、死別体験が死生観に及ぼす影響については結果に一致がみられないが、その背景には死別体験に対する体験者の感情が存在している可能性があることが本研究の結果によって示唆されたといえる。

(2)危機的体験との関連

本研究の結果、危機的体験の有無が死生観に及ぼす影響はみられなかった。しかし、本研究ではデータ数が少ないために有意な結果が得られなかったことも考えられる。

(3)死に対する思索との関連

本研究の結果、死に対する思索の有無と死生観に何らかの関係があることがわかっ

た。このことから、死について考える際にはなんらかの感情が生じ、思索すればするほど感情が喚起され死を感情的に捉えやすくなることがうかがえた。これは「『死』を思い浮かべる場合には、客観的な事象としてではなく、様々な意味、価値、態度、信念などを付与した形で想起がなされる」とする丹下（2002）の結果に通じると考えられる。一方、死について思索しなければ感情は喚起されないため、死を客観的・思弁的に捉えやすくなる傾向があることがうかがえた。また、李（1990）によると「青年は、生、死、言葉、身体に対して、肯定的と否定的の両方のイメージを同時にもち、…両者を共存させている」。このことから、死についてより思索するほど死に対して感情が喚起されるようになるが、そうして様々な死を思索しているうちに、死に対して否定的・肯定的両面について認識することが可能となり、生死の捉え方に葛藤が起ることも考えられる。

(4)生まれ変わりとの関連

本研究の結果からは、生まれ変わりを信じるのが死生観に与える影響はみられなかった。しかし、本研究においてはデータ数が少なかったために有意な結果が得られなかったことも考えられる。

4. エピソードの特徴

エピソードにはそれぞれの特徴に応じた回答がなされているように思われる。そこで、状況に応じて一部のエピソードを選択するなどの使用も可能であると考えられる。例えば命の大切さを考えさせるためにはエピソード 3・6・7 を用いて話し合ったり、死を前向きに捉えることを考えるためにはエピソード 2 または 7 を用いてテーマとして扱ったりする方法が考えられる。また死の道德観念に焦点を当て、かつ感情面にも焦点を当てるとするならばエピソード 5 を用いるなど、様々な使用方法が期待される。

5. エピソードを用いた方法の有用性

(1)人格検査として

本研究では、個々人の死生観を明らかにするために、死に関するエピソードを作成してそれを用いるという方法をとった。そこで、このエピソードは個々人の死生観を知るために有用であったかを検討しておきたい。各エピソードの回答を見てみると、エピソードへの回答にはかなりの個人差が表れている。したがって、これらのエピソードを用いて個人の死生観に関するパーソナリティを伺い知ることも可能であろう。すなわち、11 のエピソードを通して、どのようなカテゴリーに属する回答が多かったかなどを調べることによって、人格検査として使用する可能性も考えられる。

(2)デス・エデュケーションの一技法として

丹下（1995）によると、「能動的にその問題を自己の内部で扱い吸収していこうとする動きによって肯定的な死生観は形成されていくのであり、その動きは人生に対して積極的な姿勢を持つことにつながりもする」とされる。本研究の回答の中に、エピソードを読むことにより死について考えたなどの記述がいくつかみられた。ここから、

丹下のいうところの、人が死の問題を能動的に扱うことをこのエピソードが促進しているといえるのではないだろうか。本研究は死の問題への予防的なかかわりのための基礎的研究としてエピソードを作成したのだが、これ自体がデス・エデュケーションを進める一技法となる可能性が示唆されたといえよう。

5. さいごに

医療技術の進歩によって脳死や尊厳死など新たな問題が浮かび上がってきたように、変化し続けていく時代の中で、死の問題も少しずつ変化してきている。また人間が成長していく中でも、死の問題はそれぞれ異なった意味や様相を持つようになるだろう。

本研究の結果、大学生においては死について意識することが少ない傾向がうかがえた。一方で、死について思索することが死を両面的に捉えやすい傾向がうかがえた。これらから、必ずしも感情を表出させることを必要としないが、死について前もって考えることが死に対して否定的側面だけでなく肯定的側面も捉えられるようになると考えられる。臨床場面においても、死について考えることが死の問題に予防的・治療的に関わることに有用であるといえるだろう。

その際に、本研究で作成したエピソードは死の問題に対するケアやデス・エデュケーションにおいて、その一助となりうるものが考えられる。

付記：本研究は、2007年度春に徳島大学大学院人間・自然研究科（臨床心理学専攻）に提出した修士論文を加筆・修正したものである。調査に協力頂いた方々、執筆、分析に協力頂いた先生方・後輩、何より同期生に記して多大なる謝意を申し上げます。

引用文献

- Deeken,Alfons 1986 死への準備教育 第1巻 メヂカルフレンド社
- 藤井美和 2003 大学生のもつ「死」のイメージ：テキストマイニングによる分析 関西学院大学社会学部紀要 95 p145-154
- 堀薫夫 1996 大学生と高齢者の老いと死への意識の構造の比較 大阪教育大学紀要 第IV部門 44 2 p185-197
- 金児曉嗣 1994 大学生とその両親の死の不安と死観 大阪市立大学文学部紀要 人文研究 46 p1-28
- 隈元みちる 2003 死別による生の意味の変化に関する一考察 「異界」との関わりのなかから 心理臨床学研究 21 1 p25-33
- Kubler - Ross,Elisabeth 1969 On Death and Dying Macmillan (川口正吉訳 1971 死ぬ瞬間－死にゆく人々との対話－ 読売新聞社)
- 松田信樹 2000 死の不安の年齢差に関する研究 大阪大学教育学年報 5 p71-83
- 三好順子 1999 青年期の死生観－死に関する経験及びアイデンティティとの関連－ 鳴門教育大学大学院 学校教育研究科 修士論文（未刊）
- 李敏子 1990 生,死,言葉,身体のイメージ－青年を対象として－ 心理学研究 61 2 p79-86
- 丹下智香子 1995 死生観の展開 名古屋大学教育学部紀要 教育心理学科 42 12

p149-156

丹下智香子 2002 「死」からの連想後のK J法による分類—死生観の構造の検討—
名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 発達心理科学 49 p157-167

丹下智香子 2004 青年前期・中期における死に対する態度の変化 名古屋大学大学
院教育発達科学研究科紀要 発達心理学研究 15 1 p65-76